



# 岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

文学における都：  
泉鏡花「夜行巡査」「注文帳」にふれつつ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 亀岡, 泰子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/38066">http://hdl.handle.net/20.500.12099/38066</a>

# 文学における都

―泉鏡花「夜行巡査」「註文帳」にふれつつ―

亀岡泰子

(1)

日本の近代において、都という概念はそれまでの時代とは違つたさまざまな色合いを帯びている。

近代以前には「都」とはおおむね京都をさすことばであり、また比喩的に江戸をさすことばでもあった。それか江戸の東京から東京への改称、そして天皇の東遷＝遷都によつて、明治以降、都という言葉は過去の都たる京都・江戸をさすとともに、新都東京をも意味することになっていく。そしてまた東京という都市自体が、明治維新における遷都という政治的な起源によつて、みずからのうちにかつての京都的な要素としての天皇―宮中をもち、またその実体的な場としては江戸の市街をそっくり受け継ぎながら、これらの土台の上に、封建体制から中央集権体制へというまった

く異なつた体制の首都へと組み替わっていく過程にできあかつていったといえる。比喩的にいうならば、東京は京都・江戸そして多分いまだに形成過程にある東京という三層構造をもつた都市なのだ。

この稿では、近代文学という場の中に「都」という概念かどのように反映されていったか、また近代文学の個々の作品における「都」のイメージが実際の東京の変遷の過程を背景にしたとき、どのような意味を語りかけてくるかをみていきたい。

(2)

明治文学のなかで、「都」という語はどのような現れかたをしているだろうか。ここではひとつの手がかりとして、「明治文学

全集総索引」における「都」の用例およびそこに描写された都のイメージをみてみよう。

まず「都」の語が京都をさす場合については、「都踊り」「都染め」「あるいは「京わらんべ」という語を伴ったり「いにしへの」という形容語を伴いながら「あづまのかた」と対比されるなどといったあきらかに京都をさすと特定できる用例を除くと、「都」という語が単独で京都という都市をさしている用例は意外に少ない。このような例はおおむね「東西南北」（与謝野鉄寛）や「みだれ髪」（与謝野晶子）のように、あらかじめ京都が舞台として設定されているというコンテクストの上に成り立っており、それ以外には、「草の田舎」「山辺」などの対比項としての都市または都会として京都を指すケースが多く、この場合東京とも京都ともあるいはそれ以外の都会とも弁別しにくい用例も出てきている。それに対し「都」という語が単独で東京をさす用例は、明治二〇年代以降に数多くみることができ、その用例をいくつかあけておこう（用例中の傍点は亀岡）。

私の願いは東京の客にも都人にもあらで、故郷の我として帰省し、唯々年長けたる我として接待せられんことにあり（後略）。

「我らには東京も用なけれど、せめては都人の生活なりと聞かしてよ。」我即ち答へて曰く、「逆旅に生れ、下宿に育ち、酒肆に祝言し、仮住居に迷ひ、病院に死して、他郷の土に埋まる、卿よ是れぞ都の生活なり」と（後略）。

座定まり宴初まり、遂に東京なる質問の継出しければ我は左の如く答へたり。

「然り吾友、実に東京の繁華は卿等の問ふ所の如く、浅草観音の耳は、処女の願言に眠る間なく、新富座の演劇は、食頃に巨万の富を挙げ、神田祭に死人あり、夜毎に火事の花は咲き、チャリネの曲馬は都人の金庫を震ひ、花巷には不夜城あり、銀座には暗夜なきも、我は敢て告白す、都は寥しき社会なりと。煉瓦の大廈、四壁の長家櫛比して空地なく、屋上ならずば、物置場なき程なるも、其合壁は万里の長城、其敷居は絶処の関門なり、百万の都人は勿論同じ管より飲み、同じ天より呼吸するも、其交際は唯一家内の快樂なり。毎朝顔を其隣人に対するも、其隣人は日に異なれり、其家に昨日は貸家の札張られ、今日美麗の店張られ、明日は又貸家の札張らる。亦何処にか心を許すべき。是故に渠等の快樂、憂苦、恋愛、親切、皆家の奥に置まりて戸外に溢れず。其れ然り、変化多き土地には、永久なる交際ある由なし。吾友よ卿等は知

れり、鄙にありては、二里三里の他郷より情人を得ることを、然れども東京にありては、唯家内主従の恋あるのみ。大坂のお染久松、江戸のお駒才三、京都のお仲清八の活劇は、是れ都会に於る常情のみ。蓋し都会の声は個々乱れ弾く音楽の如く、賑かなるに似て騒がしく、村家の声は合奏したる調子の如く、淋しきに似て甚だ温かなれば、都会は一時の滞留に適するのみ、永久の住処は村落にこそあれ」と（後略）。

既にして漸く首府の習慣に嫻れ、初には京語を語り、次には京衣を着け、次には京情を解くに及びて、或は顔色を修めて児女の憐れを求め、或は挙止を軟けて父老の好意を博せんとし。前二三年の間、未だ京人たるべき修行ほど、記憶に恥づべき愚痴働きし時期はなかりき。

宮崎湖処子「帰省」(明23・6)

女房は思ひ設けぬ都見物の意気になつて、自己より先娘に何々の着物させて好からむ、何の帯しめさせて似合しからむ、東京は人の眼高ければ假合好き物着せたりとて取り合せ可笑くば、天晴土気臭き風情の醜さと嘲笑はるべし(中略)、眠られざるは同じお染、明後日は父様母様と共に予て見度もひし東京に行く事か、上野の山は何のやうなところならむ、都鳥の居るといふ墨田の川は何程大きく景色よき川ならむ、博

物館も見たし、図書館といふには何万巻の書籍のあるとか聞しが目録なりと見に行きたし、まだも様子の知りたきは東京に居て学問せらるゝ姫君達、立派な方々のお嬢様達の振り合ひ、到底田舎育ちの妾等は話しも出来ぬなるべけれど何して日を送らるゝか其様子知りたく、また華族女学校明治女学校の有様も見たし、女学雑誌の巖本さまといふ方にもお目にかゝりたけれど、是は例の父様の癖にて男に口をきくは御嫌ひなさるべければ及ばず(後略)。

(従者の)母親すがれたる綿縮子の帯の間より赤い皮の小蝦蟇口とりだして中は若干か知らず其俣やれば(中略)、嬉しとおもふ気色は頬の緩みにあらはれたるを見て共喜びに喜ぶ母、臍線金を我児が江戸での冗費に与れるなるべし。

幸田露伴「いさなとり」(明24・11)

そして故郷へ帰て来た。漂つて来たのではない、実に帰つて来たのである。彼は如何なる時にも其故郷を忘れ得なかつた。如何に渠は零落するとも、都の巷に白馬を命として埃芥のやうに沈没して了う人ではなかつた。

国木田独歩「川霧」(明31・8)

これを都落と思はれるのは心外なり、貧乏はしても未だく元氣な積に候。と小さく追書した活版刷の葉書が久本先生か

ら来た。かねて噂に聞いた如く、近々小樽の某新聞へ主筆に買はれて行く通知である。

真山青果「久本氏」(明40・10)

うちのび都を落つる若人に朝の市街は青かりしかな

若山牧水「路上」(明44・9)

「総索引」での「都」のもっとも早い用例が「帰省」のそれであることからみても、東京が「都」という自称をもつに至ったのは明治二〇年代だったと考えられる。金港堂から文芸雑誌「都の花」が出版されたのが明治二十一年十月、また「都新聞」の前身の「今日新聞」が「みやこ新聞」に改称したのが同年の十一月であることなども傍証となるだろう。

また二〇年代の用例では、東京に付随して「京語・京衣・京情」の語や博多の間を「老都人」(三奈木に対し)と呼んだ例(「帰省」)、「都会」に「みやこ」のルビをふり東京・京都双方に用いた例(「いさなとり」)、東京を指して「京城(みやこ)」と呼びまた東京で教育を受けた女性を「都女性(みやこによしう)」と呼んだ例(宮崎三昧「親の恩」明25・2)などが注目される。これらの例はおおむね漢文脈的な文体における常套表現ともいえるだろうが、一面では立身出世志向によって意味づけられた首府東

京が「京都」のイメージの華やかさを流用している時期とも考えられるかもしれない。

また「いさなとり」の引用で目を引くのは、伊豆の女性が東京を「江戸」と呼んでいる点である。これは地の文と心中思惟とが融合した文体であるため、この部分は語り手の意識とも作中人物の意識とも判別しがたいが、これなどはこの時期、東京に江戸を重ね合わせる視点が存在したことを示している。

(1) スラム民が飲んだ濁酒の異名。松原岩五郎「最暗黒の東京」(明26)には「辛辣苦味他の醴釀なる物の比にあらず。労役者はこの一時の激情を購いて興奮剤となし、これによって暴力を出し無理労働をなし、またその労疲を医する一時の薬剤として身体を欺く」(引用テキストは岩波文庫(昭和63刊)とある。

(2) ここで「明治文学全集総索引」以外の例として、参考までに「最暗黒の東京」における「都」の用例を引いておく。

一 円半の給料と二季に唐綫の着物を恵まるる者と同じく奉公人なれども、彼等には倍もしくは三倍の労あるべし。年齢十五、六より二十前後皆都人なれども、中

に庖厨を働らく者は骨幹遅ましく力量男子を凌ぐあり。月一回休日のほかは終日混合せる体臭の蒸発氣中であつて供膳洗流の勞に服せざるべからず。その辛勞とても柔しき婦人には耐えがたし。

(3)

それでは東京が「都」という自称を獲得した二〇年代とは、東京という都市にとってほどのような時期だったのだろうか。ここで明治期における東京の変遷の様相を、石塚裕道氏の『日本近代都市論—東京：1868—1933』（東京大学出版会 平3）によって確認しておきたい。

江戸が、幕藩体制下において武家地が七割を占める政治都市であるとともに大量消費人口を支える江戸地回り経済流通圏の中心としての経済都市の役割をもなった都市だったのに対し、東京は、江戸の市街地をそっくり受け継ぎこれを母胎としながら、東京たる東京への改称・天皇東遷によって、中央集権的統一国家の政治的・軍事的拠点として当初から意味づけられることになる。近代初頭において日本は封建体制から中央集権的統一国家へというまったく異質な体制への改編を断行したわけだが、首都東京

にあってさえこの改編作業は実際には明確なプログラムを欠いていた。まず東京が立地した江戸的な市街地は、二〇年代までにかけて大火と疫病の数次におよぶ蔓延に対してまったく無防備であったこと、また旧江戸の街道・横町・路地を引き継ぎ、濠・石垣・木戸・枅形で武装された未舗装の乱雑な「迷路」空間であり、また街路自体が歩車道の区別もない混合交通・振り売りや露天商の商い・路上の商品の積み置き・民家の軒庇の張り出し・大道芸人の青空劇場・裏長屋の井戸端での炊事や洗濯や住民のコミュニケーションの場などといった雑多な機能をもった生活空間であった。

それに対し新首都のモデルとしては、まず条約改正をにらんでのヨーロッパ式不燃都市化計画があり、また道路・橋・鉄道などの交通網の整備に加えて品川沖に築港することによる商業・貿易都市（港都）としての首都建設計画があった。前者は銀座煉瓦街として実現するものの家賃の高さや湿気の多さなどで空き家が続出し、明治十年には事業が打ち切られる。明治十九年には鹿鳴館時代を背景にネオバロック様式の日比谷官庁街の集中建設計画が行われるものの井上外相の辞任によってその規模は縮小される。また後者は前者と角逐しながら十年代から二〇年代にかけて提議されるものの、莫大な予算を要する築港案は軍備拡張予算に圧迫され、また条約改正からんだ横浜築港案にとってかわられるか

たちで道路・上水道整備計画に縮小され、憲法発布後の自治機能  
を欠いた特別市東京市の誕生以降、東京は十年代までもって  
いた商業・貿易都市としての首都像を選択肢からはずし、純粹の政  
治都市としての帝都としての自己形成にむけて踏み出していくこ  
とになる。

そしてその一方では政府の富国強兵・殖産興業政策に基づき、  
明治十九年の鐘淵紡績の南葛飾郡鐘ヶ淵での操業開始にはじまる  
東京の工業都市化の問題が進行していく。この工場は二〇年代に  
その設備を拡充していくが、これらの工場の労働力提供地でもあっ  
た都市スラムの生活空間は石炭による煤煙に直撃され、また上野  
公園の樹木や言問・向島の桜が煤煙の被害で枯れ始めたのが明治  
二〇年代中頃からだったという。また砲兵工廠からの工場排水に  
より神田川と隅田川河口が水質汚染されているとの報告が明治三  
十五年になされている。このような事例は、東京の興業都市化に  
よって江戸の景観が実体的に侵食され始めていることを示してい  
る。

それでは、ここまで概観してきたような東京の首都化に向けて  
の改編のプログラムは、そこに暮らしている人々の生活に対して  
具体的にどのようなかたちで影響を及ぼしたのだろうか。ここ  
で浮上してくるのが、東京におけるスラム問題である。

もともとスラム問題は江戸という都市が抱えていた問題でもあっ  
た。盛り場や遊廓・花街あるいは商業地の裏手、街道筋などでの  
零細な雑業者の密集する空間は、近代初頭の資本主義の萌芽期か  
ら殖産興業政策の一方で解体が進んでいた農村の小経営層からの  
流入人口の拡大によって、東京の大きな都市問題となっていく。

木造の過密な住宅はしばしば江戸以来の大火に炎上し、東京の  
近代都市化を急ぐ明治政府はその不燃化計画に際して銀座裏通り  
のスラム民を排除するスラムクリアランス計画を実施、結局住民  
は流民化して他のスラムへ大量移動する結果となった。また、上  
水道がほとんど整備されず不衛生で老朽化した裏長屋に密集す  
るスラム住民は、コレラ・チフス・赤痢等の水系伝染病の周期的  
な大流行や結核などによって、何回も大きな打撃を受けた<sup>53</sup>。この  
ようなスラムにおける都市衛生の問題は、明治二〇年代なかば以  
降の森鷗外による公衆衛生論に反映しているが、さきに紹介した  
二〇年代の上水道整備を含む都市計画は、住宅建設や家屋の質を  
向上させるための建築条例の制定を欠いていたためスラム民の生  
活改善には有効とはいえなかったという。また行政のコレラ患者  
対策は明治十年代においては警察力を背景にした患者の強制隔離  
であり、避病院での治療や設備がきわめて劣悪あるいはまったく  
の放置であったという事実からも、スラム住民の明治政府新体制

に対する感覚的な恐怖と嫌悪をつのらせたと考えられる。

また江戸市街地を純粹な交通・輸送手段としての道路に切り替えるため、明治初年間の広場道路の混合交通規制や左側通行令(明5)、街路取締り規則十七ヶ条(明11)を中心とした法令を施行することで道路に関わる人々(芸人を含む)の生活を規制していく。それらの人々にとってこれらはまさにそれまでとは異なった強力な秩序による統制として感じられたといえよう。

このようなスラム問題に関しては二〇年代なかばから三〇年代にかけて、松原岩五郎「最暗黒の東京」(明26)、横山源之助「日本之下層社会」(明31)、原田道寛「貧民窟」(明35)などのルポルタージュが書かれるが、近代文学史においては、いわゆる観念小説、深刻小説、悲惨小説および同時期の樋口一葉の諸作が扱った舞台がおおむねこのスラムであることは注目すべきだろう。

(1) ここで特に石塚氏の『日本近代都市論』を参照するのは、

従来の都市論と比較して、東京の都市形成史を近代(天皇

制) 国家の成立・展開の課程のひとつまとして位置づける

という観点が鮮明であることによる。ジャンルは異なるが、

たとえばスラムを「活人画に固定された闇の中の祝祭」

〔獄舎のユートピア〕 『都市空間のなかの文学』 昭57所

収) になぞらえる前田愛氏が、スラムを文明(近代)から疎外された周縁的部分とみなす傾向があるのに対し、上下水道改良問題と各地区における水系伝染病の発生率および東京府の防疫措置を通してスラム問題を分析する石塚氏はスラムを近代そのものの歪みの集積点としてとらえる点できわだっている。

(2) 一方でスラム地区以外の場合、築地の二〇年代中ごろから三十年代にかけて三菱会社が買収した神田三崎町は放射状の道路や街灯や煉瓦長屋、劇場・パノラマ館のある町並みに変貌、下水道まで完備していたという。

(4)

前章で概観してきた東京のほぼ三〇年間の推移に、さきほどの「都」の用例および「都」のイメージを重ねあわせてみると何がみえてくるだろうか。

一〇年代までの都市開発が、曲折を経ていわば突出的に西欧化した部分とそれ以外の部分との間に極端なアンバランスを呈していたとすれば、東京が「都」と自称し出した二十年代とは、東京という都市がさまざまな経緯をたどった結果、自己の選択すべき



セルフイメージを政治都市（首都）に選び、それを推進した時期であったといえるだろう。そして対比的に、旧江戸的な性格に加えて都市化と資本主義経済の進展という近代的な矛盾を同時に抱え込んだスラムは、まさに「都」東京の暗部であり都市の本質的な部分として都市の中核に据えられることになった。

「いさなとり」における東京観が、最終的に選択された帝都東京という明の部分と地方の娘の都会への憧れというコンテクストのなかで鮮やかに表現した例だとすれば、「帰省」の主人公が故郷の人々に語る東京観は、単なるレトリックではなく、さきに紹介した帝都東京の明と暗を表裏一体のものとしてさし示している。帰省の途路主人公が目にする故郷の荒廃は日本の近代化のプログラムが農村部を切り捨てていった結果もたらされた必然であろう。その結果といえなくもない、「田舎人」と自称する故郷の親類たちの東京に対する卑下と警戒のあいなかなばするまなざしは、主人公の「私の願いは東京の客にも都人にもあらで、故郷の我として帰省し、唯々年長けたる我として接待せられんことにあり」という都会人としてのアイデンティティからの一時的な離脱の呼び水として機能し、そこで故郷の親族との一時的な融和が図られるものの、祖母の「左程難儀の場所ならば、卿も年老いば故郷に帰られよ」ということばに対しては「事皆定まれる運命なるべきこ

とを叙べて」帰還を婉曲に拒絶している。「帰省」にみられる二〇年代の「都人」とは、近代という時代の中で荒廃していく故郷の村落共同体といまだにさきに紹介したような二〇年代の形成過程にありさまさまざまな矛盾を内包した東京との間を彷徨する精神だといえるのではないだろうか。

三〇年代初頭の「川霧」の用例における「都」は、よりストレートに都会生活の失敗者の落ち行く先のスラムを内包することで成り立っている。敗残者にとつての「都」の生活とはスラムでのそれにほかならず、スラムはここでは「都」の本質的な部分として表現されている。

このように考えてくるならば、さきに触れた二〇年代末のスラムを舞台とした一群の作品は、現在の文学史的評価を超えてかなり正確に近代という時代およびそれを象徴する東京という都市の問題点を突いていたのではないだろうか。

たとえばそのなかの一人であった泉鏡花の二〇年代末から三〇年代にかけての問題についてこの角度から取り上げてみよう。

鏡花の「夜行巡査」（明28・4）での主人公八田義延の性格は義務観念に取り憑かれたデモニッシュな人格設定とされ、そのカリカチュアライズされた非現実性が観念小説という呼称をこの小説に対して与える結果になったというのが現在の文学史的な定

説だろ。

だが第3章で紹介したように、街路取締り規則十七ヶ条をはじめとする規制は、乞食の母子の軒先宿りや車夫の股引の破れなどを当然とがめだての対象とするものであり、これらの規制はそれ以前の江戸の街とはまったく異質の論理であるだけに、規制されるスラム民にとってはまさにこれを怪物的な存在とみる違和感を生じさせたと推察することができる。つまり八田の極端さは彼の特異な個性というよりは、近代化をしゃにむに推進しようとした明治政府およびその周辺の啓蒙家たちに共通する志向性であり、これによっていわば凌辱された近世的な感性の側からすれば、彼らの近世的な倫理感や生活感とは異質な肌触りやその確信的な頑なさ、まさに怪物と形容するにふさわしい異質さをもったものだったといえよう。

このようにスラム住民のサイドから作品を読み直した場合、二〇年代の鏡花は従来いわれていたよりもより現実の問題を見据えた、時代に対する的確な批判者―近代という強権発動の時代への批判者として浮上してくる。この時期の鏡花は「貧民倶楽部」(明28・7)でそのものずばりスラムを舞台に設定しているが、

この作品は題名からも松原岩五郎の「最暗黒の東京」を参照していることは明らかである。「最暗黒の東京」の第9章はそのもの

ずばり「貧民倶楽部」という章題をもち、その中のエピソードのいくつかは鏡花の「貧民倶楽部」に流用されている。そのひとつ、高輪泉岳寺での貧民への施与米で前日に整理券を配ったというエピソードは、松原によって

昔しは御救い米と称して広庭に俵を積出し、難波人の乞うに任せて、いやしくも囊の口を空しゅうして来る者には誰彼の差別なく施し与えたるものなれども、かくては貧民の狡猾なるしばしば姿を変じて空囊の取次なすものあるを期せず、利するものは過分に利し、一升一人の主意万遍なく行度らざらん事を危ぶみて、かくは規則を立たるものならんか。

いやしくも施主として万民の上に立たんと欲せば須らくその心眼を寛闊にして可なり。タトエその中に狡猾なる者あって人の三人前もしくは五人前を貧り取る者あらんと、これは決して驚くに足らず。いやしくも貧民として彼が生存せん限りは、到底彼れ一人の身を以て数人前の分配を占有するの鄙吝あるを容されず、必ずやその日随一の働らき者として周囲の賞賛を博すると共にその貧り獲たる物品は、直ちに両隣合壁へ向って散じ、万遍なくその土地の露沢となるを見るは、殆んど類似たる共産主義のこの社会に行われ居るが故なり。

これを思わずして眼前に窮屈なる法を設く、知らず施主なる者は貧民の炊煙的組織をいかに見たるや、云々。

と批判されるが、ここにも、施与米という「慈善」での整理券の配布が一見合理的に見えて、近世の御救い米と比較していかに発想的に貧しく、またスラム民の現実感覚とは異質なものとかが、スラム民サイドから見た明治的な近代の限界が露呈している。その意味で、スラムは鏡花好みの伝奇的な場というのにとどまらず、明治的近代に対する鏡花の批判意識の拠りどころだったといえるのではないだろうか。

(1) 換言すれば「帰省」には都と田舎の視線の視線の交錯とそこからうまれる都のセルフイメージの形成が示されている。ここに語られるのは、殖産興業政策による地方切捨て・立身出世志向による地方エリート青年の脱出・農村部への資本主義流入による投機的な荒廃、一方で東京生活における住宅問題・上京者の受け皿のなさ・血縁地縁の共同体からの脱落による虚脱感（一方での帰るべき故郷の荒廃という虚無感）という明治国家による国家形態の再編成のマイナス面が如実に示されている。

(5)

その鏡花の三〇年代の作品「笈摺草紙」(明31・4)には、突如として、きわだつてあざやかな「都」としての江戸のイメージが映し出される。

慶応元年、上野の戦争にさきだつて、江戸は修羅の巷となる由、予め騒いだので、紫の一家は、両親と、兄と嫂、嫂は江戸の生でない上総のもので、嬰兒を持つて居た。この乳呑児と、犬張子と合乗で駕籠一挺。紫十六と云ふ時、厚裏の雪踏を赤い切で結えた旅装束のまゝ横に乗つた一挺、都合一挺。両親は老人で二人一ならびに馬に乗つた。(後略)

皆が錦絵より他に見た事のない、振袖、高島田、襲着の裾の軽い、木履穿で、紫の矢がすりに、縞珍の丸帯、猩々緋の羅紗に乱菊の縫のある箱せを懐つた、襟足が雪のやう、耳朶のすき透る、役者が舞台から下りて来たやうな後姿を、生のもので、しかも往来で眼の前に。ともすれば、袖でも触さうな処をぞろ／＼ついて歩いて人だかり、驚いて、呆れて、眼を覚して、茫乎で、うつくしい、品の可い、さつぱりした、艶な、女の都風俗をはじめて見たのは其時で。(中略)何時

の間にか素性も分つて、江戸の下谷から此方の下邸まで、土といふものは踏まないで乗打にした、金春金之丞といふ鼓打の秘蔵娘だ。但長い道中の草臥休めに、親不知で駕籠を下りて雪踏で渚を踏んだと思へ。夕日がさすので扇を翳して、杖をふり絞つて肩にかけた。衣服は紫のおなじ矢舁(中略)と、細いことまで探つて来て、誰いふともなく都落、の、紫、紫といひ囃したものである。

「笈摺草紙」の現在の作品世界は、ヒロインの年齢から換算して明治十年前後に設定されている。それよりも更に二十年へだたった明治三〇年代に鏡花はなぜ「都」としての江戸のイメージを描いたのだろうか。さきに言及した「明治文学全集総索引」では江戸を「都」とした用例は見る事ができず、三〇年代では、さきの引用の他には松岡国男・馬場孤蝶・繁野天来・高安月郊・河合醉茗らの詩における第2章で触れたような常套的な修辭としての用例が多く、その意味で「笈摺草紙」における、江戸を「都」とする用例は時代の中で孤絶している。

いうまでもないが、明治維新前夜の江戸の混乱を避けた疎開がこのような悠長なものでありえただけではないわけで、「都落」を含めての紫のイメージは江戸の浮世絵の娘風俗の再現でしかある

まい。ここで語り手が強調するのは、金沢の「片田舎」の人々の憧れの視線によってとらえられた「きりつとした、武家の風に、品は能くつても芸人の好、町家の俵な処を取ませた、眼さむる姿」といった江戸好みの理想的な娘のカタログの擬人化といえる。だがここで指摘しておきたい点は、紫の「都落」がイメージとしてはほとんど政治性を捨象してしまっているものの、ともかくも戊申戦争というまさに東京の起源にまつわる政治的な事件をバックとしている点だ。

「笈摺草紙」の鏡花は、二〇年代末の観念小説の鏡花とは異なり、もはや時代の現実のなかで近代と切り結んではない。ここでの鏡花は同時代に密着するのではなく、高年齢層世代のなかでのみ生き続けているものの、時代の中でようやく優勢になってきた別種の価値観―近代的価値観―に押され衰退していくいわば瀕死の江戸を純化する作業に着手している。

三〇年代という時代は、二〇年代にあつてはいまだに前近代的な価値観が新たなそして異質な近代という価値観と拮抗していたのに対し、次第に近代を生得のものとする世代が台頭しつつあった時期であり、また首都東京も日清日露の端境期にあつてその明の部分のアンバランスが均質化され是正されつつあった時期といえる。逆からみれば、四〇年代にあつてはすでにレトロスペクティ

うな感傷の対象となるまでに死に絶えてしまった「江戸」が三〇年代には高年齢層の中にまだ健在であり、次第に優勢になってゆき違和性を払拭しつつある近代という感性に抵抗し続けていたといえるだろう。このような感性の拮抗はたとえば内田魯庵の「社会百面相」(明34初出)にみることが出来る。

(六十路近い姑)「最う半年で三十に届く齡で頭からハミ出すやうな大きな束髪に結つて、鬘甲の挿込やらリボンやら業々しく飾り立て、(中略)、恰で十七八の娘さんの扮装だ。なんぼ児供が無いからツて容貌でも美ければ猶だしも、あの風俗での容貌へ白粉を塗つてジャラクラされては虫唾が走るノウ。昔しは那樣な妖怪は夫こそ箱根から此方、町人でも堅気な家には無かつたもんだ。(後略)」

(束髪の奥さん)「ですけれど、あの方は扮装こそ華美に粧つてますが、気性は中々シツカリして伶俐者ですよ。」(「新妻君」) ( ) は亀岡

多少厚塗りの気味はあるものの、鏡花の江戸趣味はこのような失われゆく感性を踏まえていたと考えられる。だがより重要なのはさきにふれたように、ここでの江戸という「都」像は、東京の

政治的な起源に触れる戊申戦争を背景としている点である。近代批判はこのポイントまでたどり着かないかぎり、歴史的認識はもちえない。もとより「笈摺草紙」にはその点を追求する意識は希薄だが、明治三十四年の「註文帳」はこの問題にかなり肉薄している点で注目される。

「註文帳」では、維新に零落して遊女となった旗本の娘が、長州藩出身の若侍で後に明治政府の「金モオルの軍人」となった情人と無理心中し損ねた恨みを抱いて、一種の妖異的な存在「怨霊」となって作品世界全体を動機づけていく。作品の現時はその次の世代に移っているのだが、興味深いのは、いわゆる鏡花世界においては通常「夜叉ヶ池」などをその典型として、主人公「読者が感情移入しうる「人間」」に対して魔的な存在は積極的な害をなすことはできず、それが害を加えるのは自らに対する敬意を失った人間の行動に対してだけというパターンが認められるのに対し、「註文帳」の遊女の霊は無関係の遊女を剃刀で失血死させるような加害性をもっている点だ。そのようにみればヒロインのお若も彼女の霊に操られて人殺しを行ったとも読めるわけで、読者のこの怨霊に対する違和感や嫌悪感、恐怖感を相殺する機能を負わされているのが遊女の自害のいきさつをすべて知り彼女に同情する江戸の職人だった老人二人の語りなのだが、私自身の読後観にこ

だわるかぎり、生前の彼女の江戸前の気風や凄みも、怨霊の執念の対象があまりにもアットランダムに拡散していることからくる違和感と恐怖感を消し去るには不十分である。

以上を総合すると、「註文帳」において鏡花は江戸から東京へという日本近代の起源に関わる部分にさしかかった時、凌辱された江戸の恨みの深さをストレートに妖異性に託したのではないかと考えられる。だが結果的にこのような妖異性は、語り手にとっても読者にとっても、江戸を違和的な存在として遠ざけてしまいかねない危険性をはらんでいる。だが敢えていえばこのようなジレンマは、鏡花が江戸的なものに創作上のアイデンティティを移した時点でそのゆくてに予告されていたものであり、妖異としての江戸を描き得た鏡花は、むしろこの時期に強く東京における江戸の政治性を意識していたといえる。むしろ魔的な存在と主人公（人間）との間に相互不可侵的なルールを設定することでこのジレンマを回避していくこれ以降の鏡花は、安定したパターンを獲得することでむしろ東京に対する江戸からの批判性といった視点をあいまいにしていく一趣向化していく結果に陥っていったといえるのではないだろうか。

(1) 本文に「梅暦の中なるが、洒落本の中から駈落ちをして来

たのであろうか」とあるように、鏡花の江戸娘は実体的な存在というよりは近世文学というテキストを通過した存在であるといった方がより適切だろう。しかしながらこれら江戸後期のテキストにおける美意識自体は、上方を強烈に意識しつつそれとは一線を画した江戸趣味といえる。

(この稿は東京大学国語国文学会でのシンポジウム「文学と都」における報告をもとに書いたものである。)